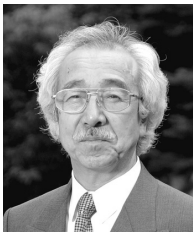
多メディア社会における交通と通信の連携

「通信と放送の連携」から「通信と交通の連携」への発想へ

飽戸　弘 Hiroshi AKUTO



放送倫理・番組向上機構（BPO）理事長
東京大学名誉教授

私と国際交通安全学会（IATSS）とのかかわりは、IATSS「会員」の頃、「褒賞委員会」に委員として参加した数年間と、グループ研究、「ニューメディアの社会生活への影響－アメリカ、フランスでの調査より」に主査として参加できたことの二つが、記憶に残っています。

当時の褒賞委員会は、数人の委員で、毎年書類審査で“新しい交通システム”や“新しい街づくり”など、意欲的試みをしている市町村を選び、委員全員で現地調査を行い、年に１都市を表彰するというものでした。北海道では確か、バス交通に新機軸を打ち出した町が表彰されました。しかし交通に限らず、街づくりや観光などの産業の活性化の試みも含めて審査するのが特徴でした。九州の知覧では、武家屋敷のある古い街並を生かして、新しい郵便局などの施設も街並みに調和させるなどして、観光の活性化に尽力していました。岐阜の高山も古い街並みを生かし、もと酒屋さんのお店をそのまま喫茶店にしたりして、街並みをさらに洗練させていました。企画を進めている皆さんの苦心談を伺い、感銘を受けたことでした。

もう一つは、私の長年の関心事であった「通信と交通の相互貢献」という課題についての共同研究が採択されたことです。通信が発達することで交通が変化し、新しい交通システムの充実が通信をも変えていくことは、日常体験しているところでした。さらに当時、アメリカとフランスで注目を浴びていた新しいメディア、「ヴィデオテックス」は、通信（電話）と放送（テレビ）を融合し、双方向コミュニケーションを実現するメディアとして、交通にも甚大な影響をもたらすものと考えられました。アメリカではニューヨークタイムズをはじめとする新聞社、放送局が、次世代メディアとして注目していました。マイアミでは、富裕な都市、コーラルビーチ市を実験都市とし、ヴィデオテックスの放送を始めていました。マイアミヘラルド新聞も「ビュートロン」の本格的試験放送を行っていました。一方フランスは、国策として、ヴィデオテックス、「ミニテル」の普及を推進し、世界のニューメディア先進国を目指していました。スペインに近いフランス西海岸の高級保養地、ビアリッツ市では試験放送が始まっていました。こうした状況の中で、ニューメディアの発展は交通に、そして人々の交流に、どのような変化をもたらすかはIATSSにとっても重要な課題と考え、放送研究者の私と、通信の専門家である小松崎清介さんとが中心となり、アメリカ、フランスの現地調査の企画を応募し、それが採択されました。3年余の調査の結果、Akuto（1988）として、まとめることができました。

いまヴィデオテックスの時代はインターネットに入れ替わり、さらにスマートフォン、タブレットの普及で、新しい「ブロードバンドネットワーク」の時代に突入しようとしています。新しいメディアが新しい交通・交流の形態を形成していくことでしょう。上記二つの研究・活動が有意義であったことを確認でき、今後もこうした研究を続けていきたいと思っています。

【文　献】Akuto, H.：New Media's Impact on Social Life－From Research in the U.S.A. and France－, IATSS Research, Vol.12, No.1, pp.72-83, 1988

1935年生まれ。1959年東京大学教育学部卒業。75年東京大学新聞研究所助教授、同大学文学部助教授、教授を経て、95年東洋英和女学院大学教授、2005年同大学学長。現在、社会調査協会理事長、NTTドコモモバイル社会研究所所長、日本行動計量学会理事。（顧問／1981年会員就任）